

かんが
電 官符は、大政官「大津京」57^p
の略 (こと)

けいぎょう
敬仰 672

4,644^p

「大輔」57^p 続紀(白) 1-25^p (大宝元年)
「大輔」57^p 続紀(白) 2-149^p (天平12年)
行幸 568

天武2年に移して創建
4636^p 園城寺・三井寺
4635^p 志賀(山)寺

崇福寺の隆盛と衰退

では、天武二年(六七三)に近江国へ移し

て創建された。日崇福寺に志賀寺、志賀山寺

園城寺、三井寺は、その後、どのような運

命をたどったのだろうか。

● 日続日本紀によると、大宝元年(七〇一)

八月には大政官処分として志我山寺(崇福寺)

に寺封が施されてあり、天平十二年(七四〇)

十二月には聖武天皇が近江国に行幸して親し

くこの寺を訪ねられた。

● 日栄華物語には奈良時代中頃この寺で弥

勒会が設けられたと記されており、また、今

昔物語にも伝法会がこの寺で行なわれたとあ

り、この頃の崇福寺は朝野の敬仰を集め、

弥勒信仰によって隆盛をきわめていた。

● そして、平中遷都後も、崇福寺は、和国の

大安寺・葉師寺・興福寺・法隆寺・東大寺な

どと並らび、十大寺の一つとして重きをなして

いたことが、延暦十七年(九一七)六月十四

日の大政官符から分かる。

元興寺・四天王寺・西大寺・川原寺

令和元(2019)10.3(木)~10.5(4回)
令和2(2020)6.7(日)~6.8(4回)

8/下6/8
6/7

大津京 57P
日本紀略 延喜21年
云1702P

4,645P
(22行)

とはいえ、
延喜二十一年(九二一)十一月四
日、日本紀略によれば、
「暁々、崇福寺堂塔
雑舎等焼失」とあり、
この模様を日扶桑略記
は「拂地無残」と述べ、
「灰燼に歸したのだった。
伽藍」とごくか、
その後まもなく再建され、
年(九六五)に再び全焼し、
「十大寺の一つと
して栄華を誇った崇福寺は、
次第に衰運の一途をたどり始めた。
以降も度々火災や落雷
に見られ、
そのうち平家末以後はほとんど文献に
顔を出さなくなっていた、
という。(「大津京」林博通、ニユー・サイ
エンス社、五六―五七頁参照)

*

「か」でない。「かまふ」
紀下368P

4,646P

懐八葉 68P

天つぎ 改行
改行 改行
4645末 2302
4633-1/2 紀下367P

かまふの
遊獵

天智天皇は多忙であつた。

天智七年(六六八)正月三日には皇太子大友

皇子を西の天皇とし、正月十七日には

寺の起工式を行ない、二月二十三日には大海

式も一段落として、ようやくうーた儀

西の朝廷の天子となつた我が子が、すぐれて

たくましく、風骨世間の人に似ず立派である

ということであつた。(「懐風藻」参照)

この当時、唐・新羅軍は、高句麗を攻めていた。(後述)

そんなある日、

「蒲生野へ、遊獵に行こう」と

言い出さした。

そして、大友皇子が天皇位に即かしたその

同一年の五月五日に、葉狩が行なわれることに

なつた。(天智七年(六六八))

天智紀七年五月五日条に、

天皇、蒲生野に縱獵したまふ。時に、大

皇弟(天智天皇の弟、大海人皇子)・諸王・

内臣(中臣鎌足)及び群臣、皆悉に從な

21
94
遊獵
を
群

かい太 352' 開作

4,647^P-1/5

和名抄 653^P 地8行476^P
田4664^P 豊前ノミ 草草かある33 田4662

宇治谷 217^P

とある。

この物語では、あえて、

天智天皇・大友天皇をはじめとする煌ひ

やかな一行は、近江国大津の東約三

十^時の蒲生へではなく、筑紫国大宰府の東北

約四十^時の蒲生の野へ、薬獵に行かれたので

あろう。

と考えてみた。以下第18・19・505頁、写真版727・728参照

豊前国企救郡企救村（小倉市の南）に日蒲

生とという地名があり、倭名抄に日蒲生と

ある。尚、蒲生あたりに流れる川は日紫川と

名、蒲生川・桜川と呼ばれている。又、この地には曹洞宗の大興寺があつて、

此寺の前の池は日紫ノ池と呼ばれて来た。しかし元禄年中に開作した田に

（「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版、

へ蒲生へ蒲生川へ紫川へ参照）

ともあれ、小倉の南の日蒲生には、日紫

川が流れており、日紫ノ池があつたと

伝えられており、

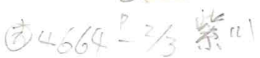
伝えられていて

伝えられていて

伝えられていて

伝えられていて

太田 3⁴ 12-17 F-21.



5
 層のそでる ⑤ $4649^{\circ} - 1/2$

源流

まず測定

7x3=21

4664-7/39m
58601-20m

第 505 号

紫川水系

上ノ
~~水~~系 13A9
水系の植物相 歌と植物を語る会 1999年2月15日発行 口絵 50分 地図参照

空をきれいなブルーに下さい。

4.647^P - 3/5

カメ

- カー
- 左頁の上、
2/3に、
上へはみ
あさせて
掲載
下さい。

ヨコレをトル



紫川中流域の景観

ト

1369 1409 写真図版 727 紫川中流域の景観

『紫川水系の植物相』 歌と植物を語る会 (北九州市小倉南区) 1999年2月15日発行 口絵参照

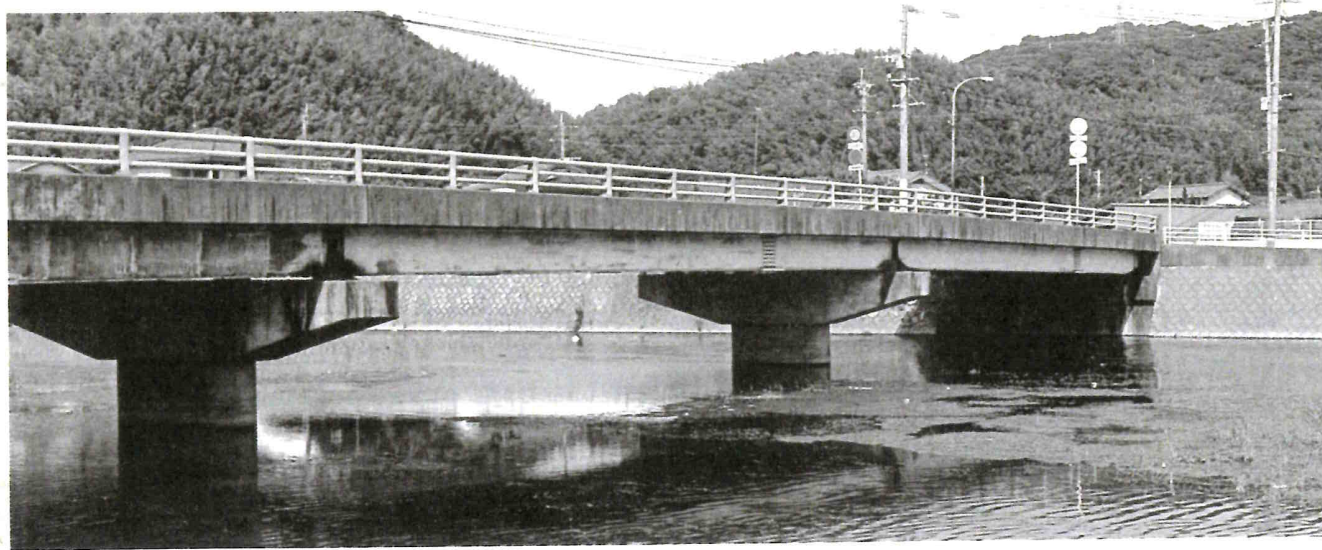
4,647^P-4/5

・左頁の下、

1/3に、

下へはみ出し

掲載下さい。



蒲生橋

13QG

14QG

写真図版 728

むらさきがわ

紫川中流域の蒲生橋

かもうばし

半字アキ

『紫川大図鑑』福岡県立北九州高等学校魚部 2011年7月7日発行

628

たくほん
拓本
平山武彦氏 採集

1811 5/21
標 5

一陽 121

4647-5/5

やや里の赤色を茜色という。H12.12.22 T1にて。
501-20 注20 撃 919

て、非常に興味深いと思われる。
大宮人達を乗せた船列は、小倉に至った。
と思われ、
牛車に乗り替えた貴人等は、紫川沿いに溯
ぼっていったのではなからうか。
蒲生野の
南の空に、茜色の根で染めた赤色の
やや濃い色の太陽があつて、繁榮と輝い
ていた。(写真図版 729へアカネ参照)
さわやかな五月の風が、蒲生野の草原を吹
き渡つてゐた。
男たちは狩衣で身を包み、女たちは野遊び
の軽装であつた。(以下、「額田女王」井上
靖、新潮文庫、三八七頁参照)
標(領有を示すし)によつて囲まれた
広大な標野(一般人者を立ち入らせない園)
の一隅が、女たちで、色鮮やかなお

563, 12.8 世
49. 4. 2 世

あたり
辺元 43^p

小林 961^p
退 後入さがる

改訂

肥後指(おとし)

4,648^p - 1/3

むらさ
「紫草」 50-21

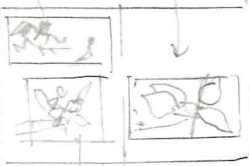
花紫白小花

紫草 2159^p 「額田姫」 392^p 尺中 1374^p
火山土に育つ(後世)

花畑のようにならばだけ
額田は、この蒲生野の只中を、あてもなく
ただ一人歩いていった。
紫川(蒲生川)の流れを見はるかす丘の一
帯には、白くて小さい可憐な花が咲き誇っていた。
それは、紫草の花であつた。紫草の根は
紫色の染料になるという。(皇室図説 730 紫草参考)
その紫草の絨毯の上を、額田は歩いて行つた。
紫草の野は、どこまでも広がっていた。
そのとき額田は、皇太子大海人皇子の騎馬の姿を目にした。
その馬は、紫草の野を何の容赦もなく踏み荒しなからやつて来て、目の前で止つた。
思わず額田は、二、三步あとに退かっていた。
馬を降り近づいて来る大海人皇子の烈しい眼が、まっすぐ自分を射ぬいていく。
額田は、感動した。額田はまたあとに退かした。
「大勢の人が見ておりますし」
額田は、絶望的な思いで辺りを見廻した。
次の瞬間、はじかめたように額田の群を離れ、大海人皇子は、さつと馬にまたかつてい

- ・カラー
- ・右頁の下半分にはみ出して大きく掲載下さい。
- ・上下を間違えないで下さい。

次々頁
君が袖振る



- ・対生する2枚の葉が普通の葉で、他の2枚は葉のつけ根に出た托葉が発達したものである。

13QG

『薬草カラー大事典』伊澤一男、主婦の友社、平成10年4月20日発行、567~8頁参照。

・美しいアカネ色に染める染料植物である。根の煮汁が熱いうちに、灰汁で処理した布をつける。この作業を繰り返すと緋色に染まる。灰汁の濃度が薄いと黄色に、濃いと赤みが深くなる。

14QG 写真図版 729 茜

11QG 右側の (アカネ科の蔓性多年草)



・カラー
・左頁の下半分に大きく掲載する。

ゴ4
12QG

- ・日当りのよい草原の植物で、^{たんはくね}淡紫色の根から^{せんりょうちゅうりゅう}染料を抽出する。
- ・夏に咲く花は白く小さくて目立たない。
- ・高さ約50cm。

中心3つわけ

ゴ4
13QG

右つめ
11QG
ゴ4

春日大社神苑 萬葉植物園 写真=春日大社

全体を右上へ移動

紫草 写真4版 730 中心3つわけ 14QG

632P

・カラー

カット
←

4.649^P - 1/2

紫川水素は46x7-5(黒い) ヨコレを取る。コピーの際
ついたもの
です。
↓

・左頁の
上半分に
限度一杯
はみ出し
大きく
掲載下
さい。

・額田姫の
目鼻が
消えないお
うまに
下さい。



←

1304

ぬか 友のおおきみ

1404

第506回

きみ そで お
君が袖振る

『(画集) 額田女王』上村松篁、毎日新聞社、昭和44年11月30日発行、109頁参照。

左

誰

ニ
ッ
チ
ハ
ヤ
ッ
テ
来
る

残念

た	か	一	二
---	---	---	---

このころは退散する

717

他日、汝の館に
出向いて行く

という言葉を残すと、大晦日皇子は馬を疾馬

さ
せ
て
い
た
や
っ
て
来
方
も
早
か
っ
た
か
い
退
散

の仕方も早かった。

額田は、去つて行く大海人皇子の後姿を見

送	つ	て	い	夫	。
---	---	---	---	---	---

と突然い
大海人皇子は、
ニちらを振り返り

袖を大きく振った

第 506 図 参照

それは一瞬のことであった。その後は一

速に馬に
け
その姿を
小さく
してゆき、
――
――
――

かたの林の中に消えた。

額田は、皇太子である人々をそなたにも周章

て退散させたものか
何か知らなかった。
そう

へ
 眼
 を
 遣
 水
 は
 、
 そ
 水
 か
 何
 で
 あ
 る
 の
 か
 直
 ち

判ったであろ
うが、すぐ
にはそうい
なかつ

不自然になりそうな気がした、見ない

も判るようになって思えたからで、
~~あ~~った。

4652 215

まん中→

改行

#上端 400

4650

「さて」

うたげ

宴 1910

4648 1/3 15

4649 1/3 39

びやか行

回りす 2169

暫くしてから、ゆっくりと視線をめぐらす
 と、さして遠くないところに、二、三十人の騎
 馬の一群が遠ざかりつつあるのが見えた。
 ■それは、額田が思ったとおり、明らかに天
 智天皇と供奉の朝臣たちであつた。そのいで
 たちは、ひと目で分かるものだつた。
 旗を靡かせた華やかな集団は、何事も
 無かつたかのように遠ざかつていった。
 宴
 さて、長い夏の日も暮れて、盛大な宴が始
 まつた。の場
 ■広い宴会にはたくさんの篝火が焚かれてい
 て、辺り一面、昼をも欺くような明るさであ
 った。■そんな中、次々に、今日の行楽に取
 った歌が披露されて、
 ■やかて、額田は額を上げた。自分の名が呼
 ばれたからである。額田は立ち上り、宴席
 のまん中へ出て、玉座の方に礼をした。
 へいま、天皇は、自分の方に眼を向けてお

そうい
相違(そうい) 1281^P
相異

#上400^P
402

万1-21^P

4,651^P-1/2

られるに相違ない ✓

■ そう思った時、ふいに額田は、今まで考
ていたものとは全く違(ちが)つた歌をうたおうと心
に決めた。

■ 瞬時にして歌はまとまった。

あかぬ
苗さす

むらさきの
紫野行き

いめの
標野行き

のまり
野守は見ずや

きみ
君が袖振る

(万一一二〇)

■ 額田はゆっくりと詠った。

13.5cm
あかぬ
茜色の光輝く紫草の野を行き、標野を行

きました。そうしたら、あの方が遠くで袖を

お振りになりました。野守が見ていないかと

心配でした。(野を守る番人)

■ 額田はもう一度詠った。

■ へ一体、君が袖振るしの君とは、誰の

とであううか ✓

誰^{だれ}もが、このことに関^{かん}心^{しん}を持^もたず^におし
なかつた。

へ額^{ぬか}田^たに對^{たい}して袖^{そで}を振^ふった人^{ひと}こそ、額^{ぬか}田^たの
意^い中^{ちゆう}の人^{ひと}であらう。

と思^{おも}ゆるのだつた。

しかし額^{ぬか}田^たは、この歌^{うた}は誰^{だれ}に判^{わか}らなくとも

天^{てん}智^ち天^{てん}皇^{こう}にだけは判^{わか}つて貰^{もら}えるに違^{ちが}ひな
りと思^{おも}つた。――天^{てん}皇^{こう}に判^{わか}らぬ筈^{はず}がな
いと思^{おも}つ

た。
茜^{あかね}色^{いろ}の光^{ひかり}がさす紫^{むらさき}野^のを行^やき、標^{めい}野^のを歩^{ある}
い

つたのです。そうしたら、突然^{とつぜん}あの方^{かた}がや

つきて、去^さり際^{ぎわ}に袖^{そで}をお振^ふりになつたので

す。その時の様^{よう}子^すを、野^の守^{もり}か、あるいは誰^{だれ}か

か見^みていて、誤^ご解^{かい}したのではないだらうか
と氣^きが氣^きでなく、心^{しん}配^{はい}でなりません。このよ

うなことを申^{もう}し上げるわたくしの氣^き持^{もち}、お察^{さつ}
りいただけますでようか。誰^{だれ}に判^{わか}らなくて

も、あなた様^{さま}にだけは私の苦^{くる}しい胸^{むね}のう
ちを御^ご理^り解^{かい}いただきとう存^{ぞん}じます。
そして、額^{ぬか}田^たが歌^{うた}つてから何^{なん}人^{じん}目^めか、大^{だい}

①-21 注21
#上 404

4,652^P

4650*19年 ひつみのみこ
まん中 大皇帝 紀下 360
75行

皇弟大海人皇子の名が呼ばれた。

額田は宴の席の中央に現われた大海人皇

子に眼を当てていた。大海人皇子がいかなる

歌を詠うのか下気掛りだったからである。

大海人皇子の柳場のある声が聞えてきた。

紫草の

にほへる妹を

憎くあらは

人妻ゆゑに

吾恋ひめやも

額田には確かにそう聞えた。

歌は、さらに繰返して詠われた。

紫草からとれる美しい紫色のようになく

きりと鮮やかに映える匂うばかりの君を、

も一も憎く思っているのならば、人妻でもあ

るのだから、どうして恋慕いまいよう。憎

くないからこそ、人妻であるといふのかからず

なことにお構いなく、このように恋いつける

考えて 次行

4,653 P-1/2

おとう 驚かす 313P

#上環 404P

のです
紫草の〃という詠い出ーによつて、一座
の誰もが、
へこれは、額田の歌に対する応答歌であう
う。そうに違いない
と思つた。
もつとも、その歌の持つ大胆さが人々を驚
かせはしたか、
ては受けとらゝなかつた。
へたわむれに、恋の歌のやりとりをーてい
とーか思へなかつた。
ただ、列席者で額田だけは、この大海人
皇子の歌について違つた受け止め方をした。
茜さす紫野の中での困惑した思ひをう
たつた自分の歌が、二人の兄弟（天智天皇と
大海人皇子）の間に長らく燦々ついた火種を
燃え上らせてしまひ、
予想もしなかつた方向へ展開して行こうとし
てゐるのを感じた。

達の中

4,653^{P 2/2}

(こ)

「天智天皇」と「天武天皇」の
あかい
そうい
そうい
相違, 相異 元1281⁹

次頁
から

その考えに、額田は身震いした。
この歌は、大海人皇子が、天皇へ天智天皇
および額田に聞かせるため作つたに相違な
いかも、額田は、何とも恐ろしいこ
となから、
大海人皇子のこの歌は、天皇に対する排
戦である
と、直感的に受け取った
前頁は所受け止め方

125

(こ)

563.12.11(12)

前負心

126

たとい天皇の妃であらうとも、好きなもの
は好きなのだ、もともと私の妻であつたし
今も心の内では愛するところのないいとおしい妻
なのだ

といつてゐるように思えた。

そういえばあの時、天智天皇のいちたん一団がすぐ
 近くちかへやっまて来きてといたのに、その面めん前ぜんで、大海おほい
 人皇子みこはあえて大胆たいたんにいかにも此こ見みよかし
 額田ぬかたへ向むかつて袖そでを振ふったのだたった。そして
 まはきりと、大海人皇子おほいみこは、天智天皇の

女を恋^{こひ}してゐる^ニいと公言^{こうげん}した^このである^ニ。

外^{がい}の何^{なに}ものでもない^ニ、と^こ言^いい得^えよう。

兄^{あに}・天智天皇^{てんちてんぐ}に^こ対^{たい}する^こ口^{くち}挑^{ちやうせん}戦^{せん}口^{くち}以^い

歌
と
て
受
け
と
る
だ
ら
う
。
こ
の
歌
を
た
め
む
ぬ
の

た大海人皇子の想い加、こ水からの成りゆきに
た大^{おほ}海^{あまの}人皇子の^{みこ}想^{おも}い加、こ水からの成りゆきに
に^のどのよう^{かたち}な形をとつて表^{あら}われてくること^{こと}に
なる^ののであ^のろうかと、額^{ぬか}田^たの不安^{ふあん}はつ^つのつて

額田は、天智天皇の一徹な激しい気性と思

④ 4660P
十市・大友の妃
91 日本史料 797P
地下 591P 肺通 138P

形なすにまねなかつた。
 かつて夫であつた大海人皇子のあの射通すよ
 うな鋭い眼光を思つた。
 はじめ大海人皇子（後の天武天皇）に嫁して
 十市皇女（大友皇子の妃）を生み、後に天智
 天皇に召さされた額田王は、この歌の内奥に、
 たとえようもなく不気味な、そろ恐ろしい兆
 を感いた。

米

4.655^P-2/2

④4652^P

な お、大海人皇子の歌の中に、人妻ゆえ
に、の句があるところを見ると、
井上靖氏の「見解」のように、
八咫天皇の眼前で、大海人皇子は額田王
（天智天皇の妻）に袖を振った。
よろしく思われる。
■ それでは大海人皇子は、額田王が戸惑う
な立場にあるというのに、一体何故、袖を振
ったりしたのだろうか。
● 大海人皇子は、困惑している額田王への心
配りを欠いていて、思慮もなく、かつての妻
への熱い想いに、ただ突き動かされただけなので
あろうか。
● それとも、大海人皇子は、額田王を奪った
人として、己の存在を見せつける為、袖を振った
のだろうか。
● もしかしたら、以前の妻額田王と会って
るところを見られた大海人皇子は、現在の

向かい

4,656^p

きよせい は 585^p
虚勢を張る

なまけな 情無く 1656

みい 情め 2111

人妻と歌ふ
めたから、「夫
まいとあかき
まい。

額田王の夫である。天智天皇のもとから懐て
ふためいて離れていったのではあまりにも情
無く、惨めすぎるから、
こと堂々と振舞おうとして虚勢を張り、天智
天皇の目の前であるにもかかわらず、額田王
に向かい高き袖を振ってみせたのかも知れない。
● いやいや、それにしても、
は、臆することなく毅然として胸を張り、し
かも格調高く、
「私は今もおくかつの我が妻人妻と
なつてしまった額田を愛しているのですし
ときっぱり言い切っているように解される。
■ 恐らく、大海人皇子は、
▲ 額田王を愛している。私のもとへ返して
ほしい。恋慕の情
という胸中の熱い想いを明らかにする為
あえて、天智天皇の眼前で額田王へ向かい袖を
振ったばかりか、さらに、
の歌を作って、公然と詠ったのであろう、と
想察される。

不詳(参拜)1941

向か7

改行

4657P

壬申の乱後 天武の弟とて
戻ったという人895
つる 1895
モカ付く

うたげ 次頁 5行

胸中うらなむ 16行

では一方、天智天皇は、
たのだらうか。

・同母弟である皇太子大海人皇子から、
みつぎのみこおほしあまのみこ

へ額田は私の大切な妻だった。それなのに
力づくで無理やり引き裂かされてしまい、恋し

さはいよいよ募るばかりだ。この想いをどう
して抑えとどめろことが出来ようか。是非に

も私のもとへ返してほしい✓
といわんばかりの歌を示さず、兄天智天皇

は、額田への想いを深くさめ、いつそう手離し
難くお思いになられた。どうにも思われる。

子に言動のしづかに不気味さを感取らぬ
たかにも知れないうか。臆面もなく、天皇と指呼の

近きにある妻額田に向かつて、袖を振りなにと
いう行為が許されるものであろうか。

・さらに、紫草の山の歌にしても、天皇の存
在を意に介さぬばかりの大胆不敵さである。

とはいうものの、
へこの宴もたけなわの時、

不詳にいきり

不詳にいきり

不詳にいきり

不詳にいきり

不詳にいきり

不詳にいきり

H9.3.5(金)④
H5.9.5(月)④
→ S63.11.12(月)④

かいつ 確執 384P
自らの実見を国に示すこと
4,658P

はげしく 1783P
はかす

というた 悪歌 23P
「こころで」 4641P
4698P

おおよそ 小村 266P
大村

こと

立つことはあるまい。所詮、たゆむれの歌
よ✓
と大様な弟の妻をお見せになったのではありませんか
分らないではない「とお思いになった可能性もある」
大宮人達の宴は、いつ果てるとも知れず続
いていったのだであろう。
とこころで、この遊獵に列した人たちは、そ
の席では座興のためむれの恋歌のやりとりと
受けとったにーても、ーーーー時が経つ
につれて、いつか、
へ一人の女性額田王を挟んでの、兄天皇と
弟皇太子との確執が、実は、はーなくもあの
席で露呈されていったのだ✓
と見るようになっていったのだから、
たぶん、万葉集の編纂者達もまた、
そのように感じ取ったからこそ、ー二つ
の歌を並べて載せたのであろう、と推察され
る。(万巻ー二〇、二一参照)
ともあれ額田王は、こゝから表だって激し
くなつていく波乱の中に、大きくかわつて
いったようである。

日本書紀 197^p

469^{p-3/2} (ニ)

4659^{p-1/2}

つま 小林 291^p
石 1-17^p

同歌 4700^p にも 55^p
-2/2

■ そう思わせる歌がある。それは、有名な天
智天皇の「三山の歌」である。(写真版 731 参照)
↑ 高山は 雲根火雄々ーと 耳梨と 相あ
↑ らそひき 神代より 斯くにあるらし
↑ 古昔も 然にあれこそ うつせみも
↑ 孺を あらそふらしき (万一一十三)
と感て、その愛を得ようと耳梨と争った。
神代からこうであるらしい。昔もこのように
あつたからこそ、現世でも一人の愛を二人で
争うことがあるものらしい。(「万葉集」(一) 日
本古典文学大系、岩波書店、一七頁注記参照)
なお、
「三山の歌」(万巻一三)は、額田王を
めぐる中大兄皇子(天智天皇)と、大海人皇
子との争いを、三山に託して詠んだ歌なので
あろう。
とする解釈がある。(「日本史辞典」東京創
元社、八額田王参照)
■ また、参考次に述べると、

4.659^P-2/2

- ・カラー
- ・右頁上半分、左頁はみ出して大きく掲載下さい。

- ・ヨゴレをトル。
- ・明るくおいてください。
(現在、暗い)

由1920^(Y2) 高久の南麓、
大宮大寺の南麓

由1919[?] - 7/12[?]
天香久の写す



130G 写真図版 731 ^{てんち}天智天皇の長歌にうたわれた^{あまのかみやま}天香久山

『朝日新聞』平成28年2月18日(夕刊) <万葉集の長歌をよむ> 参照

120G 左の三角形の山は、^{みみなりやま}耳成山

H30(2018)11.789 ~ H.9(4回)

IF 1> H5.9.6(A)
H9.3.5(金)
H29.5.12 ~ 22

4.660^P

人名録495^P

④4796^P
十市皇女 ④4655^Pに8
-1/2

額田王は、はじめ大海人皇子の妻となつ
て十市皇女(大友皇子の妃)を生み、そのの
ち中大兄皇子(天智天皇)の後宮へ入り、六
十二年の壬申乱後、ふたたび天武天皇のもとに
歸つてゐるが、その間の事情は明らかでない。
という。(「人名大事典」谷山茂、むさし書
房、へ額田王参照)

*

★ 白鳥はかえりからずや 空の青海の青にも染まず漂う。 (こと)

501-193

4,661^P-1/2

能楽の歴史 47
目次 家持
128

紫草の産地について

それではここに、紫草の産地について
考察してみることしよう。

■ 万巻三十三九五に、笠せ郎が、大伴家持へ
贈った歌を掲載している。

● 大伴家持は、大宰帥(長官)であつた大伴
旅人の子で、万葉集の編纂にもつと関係
の深かつた人物である。

● 笠せ郎は、笠という若い女性の意味であり
それ以上のことはわからない。

その歌は、
託馬野に生ふる紫草衣に染め

いまだ着かして色に出でけり

未だ着ないうちに、人に知られてしまいまし

た。未だあなたへの恋の思いを遂げないでい

るというのに、胸に熱くなつているお慕ひす

る心か外に表われてしまったようです。


$$4,661^{\frac{1}{2}} - \frac{2}{2}$$

金本邦のノ史毒田47^p
万1-193³

40名抄660°
肥後口託新群

23
 悪歌な23

(14)

① 65/

$$= 2$$

補正は「豊前」④ 4647^P
→ 45.9.7(火)④
-1/2 9.7
4.662^P

③と
採る 2/631^P 長屋王 (不仁等の乱後に自害せられた)
684~729
福岡の古代を極め 31へ
③と
採る 2/631^P 長屋王 (不仁等の乱後に自害せられた)
684~729
福岡の古代を極め 31へ

三一(三二頁参照)

大宰府は、割り当て分の紫草を、九州
諸国から集めていた。文献には、豊後の二郡
と日向、大隅の国名しか出てこないが、
大宰府の官衙跡を調査したところ、糟屋郡紫草十根な
どと記した木簡十五本が発見された。その結
果、筑前の四郡と肥後の三郡からも大宰府へ
紫草を納めていたことが判明した。
さらに、長屋王邸跡(奈良市)のすぐ北側
から、大宰府を通じて紫草が届けられたこと
を示す木簡計六本が出土し、その中に「筑
前国穂波」の名があった。そしてこのうちの
二本には、「殖種子紫草」の記述があった。
古代、自生の紫草を採るだけでなく、種子
から紫草を栽培することも行われていたよう
である。
なお、大宰府への割当総量や木簡の出土状
況などから、まだ名前の出ていない豊前、筑
後、肥前も含めた九州全域が紫草の産地だっ
たのであろう、とみられている。(「福岡の
古代を掘る」朝日新聞福岡本部編、葦書房、
三一(三二頁参照))

三上山 地名 主幹路 費入 岩 503P
(近江国) 丘陵地 562
主幹路 費入 岩 503P
岩 503P 主幹路 費入 岩 503P
岩 503P 主幹路 費入 岩 503P

と1100 小鉢 237P
土壌 云 1604
227 24 189

4.663P-1/2

改訂

第507

図へ地質断面模型および地質

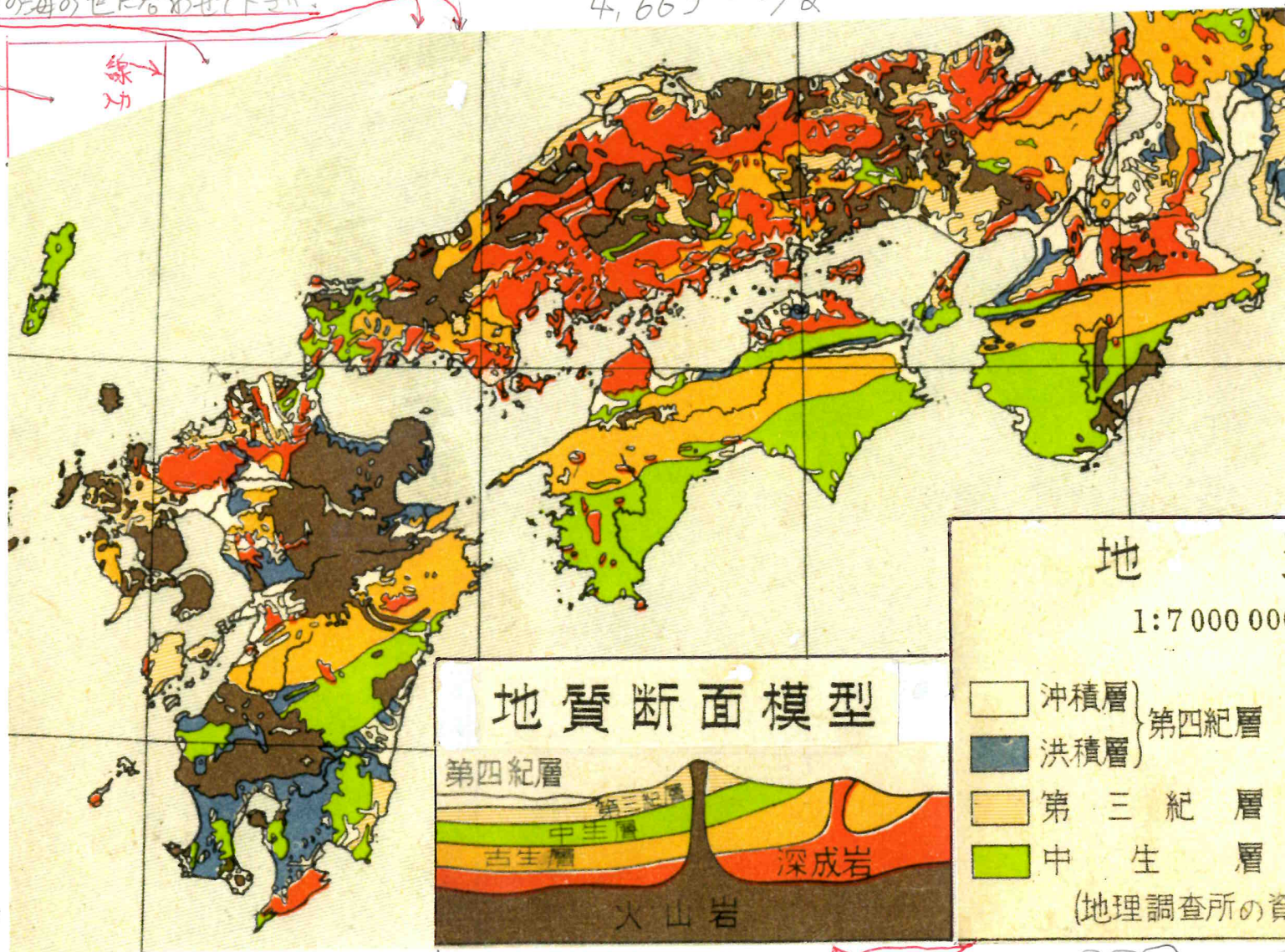
地は堆積層である。(世界大百科事典「世界
山(近江富士)は火山系地質であるが、平
る御在所山の山頂付近、および野洲郡の三上
●近江国(滋賀県)の蒲生野の南に聳え
丘陵地も、同じく火山系地質(貫入岩)だとい
●豊前国の蒲生から筑前国の洞海湾にかけての
●肥後国の託麻原は、阿蘇外輪山西麓に位置
火山系地質であり、また火山灰が降り積もる高
●近江国(滋賀県)の蒲生野の南に聳え
丘陵地も、同じく火山系地質(貫入岩)だとい
●豊前国の蒲生から筑前国の洞海湾にかけての
●肥後国の託麻原は、阿蘇外輪山西麓に位置
火山系地質であり、また火山灰が降り積もる高
●近江国(滋賀県)の蒲生野の南に聳え
丘陵地も、同じく火山系地質(貫入岩)だとい
●豊前国の蒲生から筑前国の洞海湾にかけての
●肥後国の託麻原は、阿蘇外輪山西麓に位置
火山系地質であり、また火山灰が降り積もる高

653

近傍の海の色に合わせて下さい。

4,663^P-2/2

・カラー
・左頁の
上半分に、
大きく
はみ出し
掲載
下さい。



・地質断面模型 および
地質を、小さく収めて
下さい。

・文字をシャープにする。
新しく入力して下さい。

・分けていた三角形を、
近傍の海の色に合わせて下さい。

・くらみ
・小倉の南の
赤色部分に
おぼろ
薄生は有る。

(赤色)

13Q4

14Q4

第507図

地質断面模型および地質

枠をつける

・火成岩には、火山岩と深成岩とがある。

『高等地図』田中啓爾、日本書院、昭和31年4月30日(5訂版)発行、7頁参照

・火山岩は、火成岩の一つ。地下深所にある高温のマグマが、地表に流出し、冷却固結して出来る。安山岩、玄武岩、流紋岩などの類。

・深成岩は、火成岩の一つ。マグマが地下の深所で冷却固結して生じたもの。結晶化し、粒状組織をなす。花崗岩、閃緑岩、斑岩などの類。

H5.9.8 (K) ①
17

豊前国 ④ 4647 万1-21
647-159 647 ④ 4650

4,664P - 1/3

地図・日本地図、平凡社「日本の地質」

「高等地図」日本書院（五訂版）七頁参照

ミとに口紫草^{むらさき}は、発芽^{はつが}率が低^{ひく}いうえに、

土質^{どしつ}排水^{はいすい}、日光^{にっこう}に左右^{さやう}されやすく、虫害^{ちゅうがい}や病^{びょう}

気に弱^{よわ}いなど、栽培^{さいばい}は極めて困難^{くわんなん}であるとい

う。

「古代^{こたい}でも紫草^{むらさき}の育生^{いくせい}には四苦^{しこ}八苦^{はつこ}し

たはず。栽培^{さいばい}方法^{はうほう}をよその人^{ひと}には伝^{つた}えず、そ

の土地^{とち}だけの秘密^{ひみつ}に封^{ふう}じていたのではないだ

ろうか

と推測^{すいそく}されてゐる。（「福岡の古代を掘る」

朝日新聞福岡本部編、葦書房、三二―三三頁

参照）

こういたことから、額田王^{ぬかたのおほきみ}の「茜^{あかね}さす紫野^{むらさきの}

行き^{ゆき}」の歌、および大海人皇子^{おほいあまのみこ}の「紫草^{むらさき}の

の歌^{うた}は、近江国^{おうみくに}（滋賀県）の蒲生^{かもう}に地理^{ちり}的に

相当^{そうとう}する豊前国^{ぶんぜんくに}の蒲生^{かもう}で作^{つく}られたように思^{おも}わ

れる。

天智^{てんち}天皇^{てんてい}と大友^{おほとも}天皇^{てんてい}は、朝臣^{ちゆうしん}庫^{くら}とともに下

蒲生^{かもう}野^ので遊^{あそ}び（薬^{すり}狛^{かり}）さされたのであろう。

④ 4646 179

*

655P